| | |
|---|---|
| 氏　　　名 | 潘　蕾 |
| 学位の種類 | 博士（造形） |
| 学位記番号 | 博第32号 |
| 学位授与日 | 2021年3月27日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第３条第１項第３号該当 |
| 論文題目 | 絵画における植物の人格化表現 |
| 審査委員 | 主査　武蔵野美術大学　教授　山本　靖久 |
| | 副査　武蔵野美術大学　教授　田中　正之 |
| | 副査　武蔵野美術大学　教授　川口　起美雄 |
| | 副査　武蔵野美術大学　教授　荒川　歩 |

## 内　容　の　要　旨

植物という主題は画家の作品によく登場する。アーティストたちは、自然の中で植物を客観的に写実するか、植物を通して作品の中に自分の感情を注ぐか、あるいは植物に人格を与えて植物を人格化して表現する。その中でも人格化は非常に一般的な表現方法である。植物の人格化に限らず、そもそも人格化は人間の歴史には昔から存在しており、最も初期の人格化は宗教に関連していた。現在では、人格化とは、一般的な社会的認知プロセスであるという観点から、認知心理学において研究されている。アーティストたちはどのような経験から影響を受け、どのような理由で、人格化表現をするに至ったのかを探求するとともに、私自身の作品の中における人格化表現を分析することが私の研究の主要な論題である。

絶えず研究と観察を続けたことで、絵画の中にある多くの問題について考えるようになった。絵画は私にとって技術を示すためのものではなく、またある目的を達成する手段でもない。ただ絵画という言語を通じて、自分の感情と特定の時点での記憶や感覚を語り、自然の中の万物を通じて「私」の存在を探ろうとしているだけである。ここでいう「私」とは、私が見ている最も真実な私でなければ絶対にならない。植物に自分の意図や心理状態を託して人格化する。この過程で植物に託されるのは、人間の外面的な特徴ではなく、自分の内面の精神状態だということが重要だと思う。例えば、意識、意図、情緒、希望、反省、分析、想像など。植物を対象として創作するとき、私はほとんど主観的に語るように表現している。

博士の期間に植物をテーマにした創作を続けながら、人格化に関する理論を研究した。心理学者のニコラス・エプリー（Nicholas Epley）の人格化動機理論における社会的動

機の分類に基づき、二つの一般的な表現形式があり、一つは、「人格化された宗教的エージェントへの信仰を強めること（increasing belief in anthropomorphized religious agents）」であり、もう一つは、「人間ではないものを、より人間のように知覚すること（perceiving nonhumans to be more humanlike）」である。私は、前者を「天上的」、後者を「地上的」と呼びたいと思う。天上的な人格化とは、神聖な主題（キリストなど）への信念を強化するものである。地上的な人格化は、自分の周りの動物や植物などの物質に人格を与えることである。天上的と地上的のコンセプトを使ってヴィンセント・ファン・ゴッホと草間彌生の植物をテーマにした作品を分析している。

論文は主に五章で構成され、第一章は導入として人格化動機の理論について論じ、第二章では、人格化表現の東洋と西洋の考え方の違いについて比較研究し、第三章と第四章はその内のゴッホと草間彌生を取り上げ言及した。第五章は前述の研究を踏まえて自分の作品についての思考を論じた。心理学の分野では人格化に関する論文が多く、美術の分野では植物を題材とした作品に関する研究も多い。しかし、認知心理学に基づいてアーティストたちが植物をモチーフとした絵画に人格を託す理由と動機を分析する研究はほとんどない。だが、ゴッホの手紙と草間彌生の自伝など豊富な資料は、この研究の助けになるだろう。植物の人格化表現は自己の凝結する精神の追求の具象化である。異なった人格化表現は自分の創作の精神の核を実現することができる。ニコラス・エプリー（Nicholas Epley）教授の認知心理学の人格化動機、客観的な科学概念を参考にしたが、芸術は主観的で、種々の価値志向的な文化心理現象の下で行われる個人の創作である。本論文ではアーティストの実際の精神表現があまりにも簡略化され、研究の盲点もあるかもしれないが、この天上的な人格化と地上的な人格化によって、植物をテーマとした絵画に関する研究理論を豊かにし、自分が深く理解や思考をしていなかったことを発見してみたいと考えていた。

ゴッホと草間彌生の人格化表現を分析し、自分の創作に回帰させることで、天上的にも地上的にも、自分の内面を掘り下げる必要性があることがわかった。地上的な人格化の研究を通じて、私はどのように自分の感情を集めたのかを理解し、自分の最も重要な部分を帰納的に捉え、明確な目的を持って植物に対して自分の人格を投影するようになった。天上的な人格化の研究を通して分かったことは、絵画の過程の中で、ただ 1 つの対象の繊細な描写を表現するだけではなく、いくつかの精神の象徴も必要であり、自分を考えると同時に世界と宇宙をも考慮に入れて、自分の内面を探りながら、天上に飛んで地上を見下ろす自分を想像することである。

植物における人格化表現の研究は、地上の生命の源である植物を絶えず観察しながら、自分の精神的な信仰を見出して、天上の視点に立って世界を考えることができる研究であると私は望んでいる。植物の主題に対する人格化表現の絵画を通じて、さらに最も原初的なものを探して、最も広大で最も深い真理を探したいと思っている。自然の生命と精神の生命を結合して、真実の自分と理想の自分を絶えず発掘することである。

# 審　査　結　果　の　要　旨

論文の概要

　潘蕾の博士学位申請論文『絵画における植物の人格化表現』は、制作者たる自らの植物をテーマとした制作を観察描写の表現から精神状態を伴った主観的な表現に昇華するために、認知心理学の面から人間がどのような経緯で植物に「人格化」を形成するのか、また東西洋の作家が如何なる経緯で植物の「人格化表現」を行ってきたかを考察し、自己の作品と共に表現の実践的な問題として論じている。

論文の内容と構成

　本論文は、「人格化」という概念を定義するために認知心理学の面からの検証をし、さらに社会的な動機から「天上的」と「地上的」という人格化の概念を提示した第１章、東西洋の作家を取り上げ、植物の人格化表現を分析した第２章、「天上的」な人格化表現としてゴッホの「ひまわり」を論じた第３章、「地上的」な人格化表現として初期の草間彌生作品を論じた第４章、自作を中心に論じた第５章という内容によって構成されている。

　第１章では、「人格化」の定義を行うため、まず同義語とされる「擬人化」の説明を行なっている。宗教の信仰心から始まったギリシャの哲学者クセノパネスが示した「擬人化」という概念を紹介し、さらに混同されるイギリスの人類学者エドワード・B・タイラーが提唱した「アニミズム」との共通点や差異について説明され、外的な形態を人として認識する「擬人化」に対し、人間の個性や内面的な精神や意識が反映される絵画を論じるには、「人格化」という言葉を使用する合理性が述べられている。

　また米国の心理学者であるニコラス・エプリーが「人格化」が形成される動機として示した、「誘発媒介知識」（対象を人間のように見ることを誘発する知識）、「エフェクタンス動機」（対象の行動などを説明し理解したいと思うこと）、「社会的動機」（社会とつながりを持ちたいと願うこと）３つの要素理論を取り上げ、認知と動機の観点から、人格化の原因について実作品を紹介しながら、理論的なフレームワークとして述べられている。さらに ３つの動機の社会動機で分析された理論は、ゴッホと草間彌生の作品と密接に関連していることが述べられ、植物の人格化表現における社会動機には２つの異なる「天上的な人格化」と「地上的な人格化」があることが提示されている。

　第２章では、東西洋の植物をテーマとした人格化表現のうち、ゴッホの時代以前と同時代の西洋を中心に、植物をテーマにした作品が分析され、ルネサンス以降の典型的な画家を中心に論じられている。草間彌生の作品については、アメリカに行く前の初期の植物をテーマにした作品について論じ、草間作品を中心に、東洋の典型的な植物を主題とした人

格化表現の作品について述べられ、画家の芸術的な文化の根源を通して彼らに対する深い認識が明らかにされている。そして、東西洋の画家を横断的に考え、西洋の人格化表現では、神話と宗教を明確に対象とし、人間中心性を重視しているのに対して、東洋は神というものを仮定しない思想体系があることを論じ、後述されるゴッホの「天上的な人格化表現」と草間彌生の「地上的な人格表現」の論述に展開する。

第３章では、「天上的な人格化」を説明するために、ゴッホの「ひまわり」を取り上げている。ゴッホの宗教的な土壌に育った生い立ちや時代背景、神聖な性質を持つオランダのひまわりの文化背景などを元に描いた「ひまわり」の表現が強い信仰心から描かれ、ニコラス・エプリーが研究した社会的動機が要因であり、神聖な主題に対する信念を強化することから生じた絵画における「天上的な人格化表現」であるという独自の論を述べている。

第４章では、「地上的な人格化」を論じるために、草間彌生の初期作品を取り上げている。その背景にある家庭環境から精神を崩壊した幼少期、その孤独感、幻覚の経験で周囲の事物、対象を人格化し、また社会的断絶や愛着不安などからその傾向が高まり、自身の化身のように描いた作品群を紹介し解説を行なった。そのことから草間が自分の意識を人格化した植物は、まさに「地上的な人格化表現」であると論を進めている。

第５章では、前述の研究を踏まえて、自らの作品を中心とした人格化表現について述べられている。植物を描く契機となった家庭環境について、そして自作を年代順に紹介しながら植物を「人格化」を持って捉え始めた経緯について論じている。

また中国画と東洋哲学に影響を受けて、「気」を想像した表現を行なったことや社会の状況のよって作られた作品は、周りの存在を「地上的に人格化」したものとして言及している。来日以降はアルカディアのような楽園に感情を託すようになり、「天上的」な人格化と感情の高まりを植物に投影し、ユートピアや理想の世界を創造してきたことや最近作までの作品制作において「植物の人格化表現」を考える意義について言及している。

論文の成果

本論文の最大の成果は、美術の分野では植物を題材とした作品に関する研究も多いが、自己の植物をテーマにした絵画表現を検証する中で、植物に人を投影する「擬人化」という概念からさらに踏み込み、認知心理学に基づいてアーティストたちが、植物をモチーフとした絵画に人格を託す理由と動機を分析する研究を行なったこと、そして植物に精神や感情を投影した「人格化表現」という独自の考えを提示したことにある。

また「人格化表現」を「天上的」と「地上的」の２つに分類し、実践的な制作意図に連動させ、深い真理を探究する起因となったことや自然の生命と精神の生命を結合して、真実の自分

と理想の自分を絶えず発掘する試みの中で論じた、作品制作領域を専門とする者にふさわしい充実した内容の博士論文であると言える。

審査の経緯と結果

2021 年 2 月 16 日（火）に公聴会と審査委員会を開催した。審査委員会では、公聴会での発表および質疑応答を踏まえて、審査委員から質疑を行い、学位申請者に説明を求めた。質疑応答の終了後、審査委員による最終的な審議を経て、合否を判定した。

公聴会では根本的な意味で何故対象として植物を選択した理由を問われ、また「天上的」と「地上的」という考えは、着眼点を変えれば逆転的な意味を持ち得るのではないかなどの問いがなされた。いずれの質問にも論文執筆者としての考察と知見から、自身の考えを示すことができ、博士課程の 3 年間での表現方法の変化や自らの考えも「I」から「me」と変化し目的を持った能動的な思考を持って研究に取り組んだことが示された。

審査委員会においては、ニコラス・エプリーが研究したエフェクタンス動機などの考えは、他者を対象として用いられるが、本論文では自己の内面的な部分に用いられているため、その関連的な言及が不足しているのではないか、また自作の言及における空間的な解釈についての疑問やサブライム美学についての考えや作家の内面性の表現においての過去の作品の読み違いなどの質問や指摘がなされた。

申請者退席後に審査員だけで合否の判定を行った。提出論文が博士論文としての水準と意義があるかについて議論され、研究意図、新知見に見られる独創性、論述 内容及び形式の的確さおいて水準を満たしており、博士学位 ( 造形 ) を授与するにふさわしい学位申請論文として評価され、審査委員全員一致で合格と判定した。

花が咲く時
2019 年　　油彩、モデリングペスト、アルミ箔、水溶紙　　91×210cm

満開
2019 年　　テンペラ　　31×21cm

花
2019 年　　テンペラ　　21×31cm

花
2019 年　　テンペラ　　31×21cm

チューリップ
2019 年　　テンペラ　　31×31cm

黄昏
2019 年　　水彩　　40×72cm

revelation Ⅰ
2020 年　　水彩、透明紙　　35×22.5cm

revelation Ⅱ
2020 年　　水彩、透明紙　　35×22.5cm

revelation Ⅲ
2020 年　　水彩、透明紙　　35×22.5cm

revelation Ⅳ
2020 年　　水彩、透明紙　　35×22.5cm

Wasteland with lilac flowers
2020 年　　油彩、アクリル、モデリングペースト、金箔　　190×250cm

The floating
2020 年　　油彩、アクリル、モデリングペースト　　240×250cm

Notation
2020 年　　油彩、アクリル　　100×100cm

be born
2020 年　　油彩、アクリル、銀箔　　162×259cm